

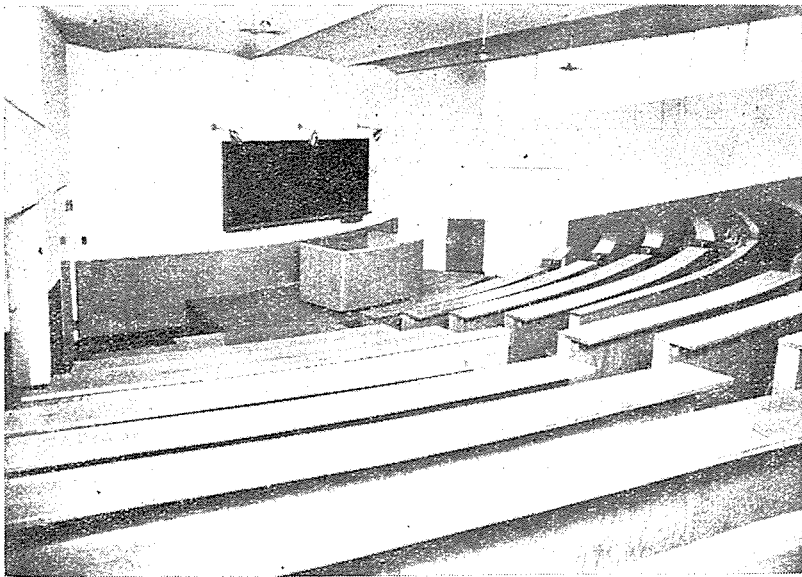
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, May 15th, 1952. —No. 248

關西大學學報

第 2 4 8 號

昭和 2 7 年 5 月



竣工した円形講堂(アンハイシエター)

關西大學學報局

フアーズ博士

を迎へて



ロツクフェラー財團
人文科学部長C・B・
フアーズ博士(Charles
B. Fahs)は昭和二十
七年四月二十五日正
午、本学千里山学舎に
來訪。岡野学長始め諸
教授を迎へられて新築
の大学ホール並びに研
究室を巡覽の後、直ち
に新食堂に於ける午餐
会に臨み、宮島理事長
岡野学長及び文学、哲
学、歴史及び語学関係
等の諸教授と食卓を囲
みつつ懇談。本学に於

ける人文科学の研究諸事項とその共同研究の状態につき隔意なき質問と応答を取交はし、更に東西文化の調和合一を如何にして図るべきかの問題に關し討議した。

食後更に図書館に於ける東洋学関係の稀覯書、往昔の大阪に於ける萬葉学派の

文献、及び最近末永教授監督の下に行はれた河内北玉山古墳発掘の出土品、並びにその記録写真等の展示、及び細江文庫を一覽し、再び以文館に於いて諸教授と会谈。博士は、特に東西歴史研究の統合の必要を説き、その原理と方法について主として石浜教授と意見の交換を行ひ、また哲学研究に關して岡野学長と談話を重ねた。特に席上、宮島理事長が強調した東西學術文化の交流融合を延いては全人類相互の緊密な融和は博士に非常な共感を呼んだ模様であつた。更に、堀教授の東西に於ける神秘主義の研究に就いての所説は興味ある問題として、盡くする所を知らなかつた。三時過閉会。それより宮島理事長の案内で雨中、東西學術研究所建設予定地である本学外苑に立寄り、すでに初夏の装いを一杯に咲きはこるつゝ、やまぶき、ふじ、葉桜を楽しく觀賞、次いで理事長、石浜教授、堀教授等と共に四ツ橋文樂座に赴いた。車中博士は更にノースロップの臨臨説を談し、A・J・トインビーの歴史を論じ、ことに後者につき、就中その東洋方面に關する問題に對して東洋の學者の率直なる批判を要望した。文樂座に於いては不幸にして目下開演中ならざりしも、名人文五郎氏より人形の使ひ方に關する実演を交へての説明を聞き、その至芸に感心され興味深げであつた。文樂座を出で、一同、夕食を共にし、十時散会した。

博士は米國に於ける東洋学の權威であり、殊に日本に對する深き理解を有し、流暢なる日本語を操り、或はW・フォークナーを談じて樋口一葉の文体に及び、或は回教國に於ける歌合戦を語つて日本の詩歌に到り、長短の詩形の優劣を論じて露伴の「出處」に及ぶ等、その古今東西に渉る該博なる智識は眞に驚嘆すべきものがあつた。而も人と爲り直率且つ謙讓、誠に東西文化の協調、東西學術の統合に於いて、人格、學識ともに此の人無かる可からざるを思はしめた。こゝに博士に對し深甚なる感謝と敬意を捧ぐると共に、今後博士の協力と指導とを期待し已まぬ次第である。(堀教授談)

(寫眞は懇談後の記念撮影、以文館に於て八島教授撮影)

祝祭日改訂始末

武藤智雄

終戦後民主・平和・文化国家になつて、あれもこれも封建的反動的として排斥された。昭和二十三年新国会の発足と共に、この論議は議事堂にも移された。祝祭日は変えなければならぬ、国歌「君が代」は考案ものである、これが文化委員会での発言だつた。封建的な「宮城」の名は改称さるべきである、これは受理した陳情書の一つだつた。国旗「日の丸」は運想がわるいと言はれたが、齡九十に垂んとする大長老議員は、国号「日本」もやめたがいゝと言ひ出した。

排斥論をぶつのは容易だが、代案は一つも出ていない。専門員だつた私は、何度ヒヤリとしたことだらう。先祖代々血となり肉となつてゐるものの中には、そう無下にケチをつけて振切れないものがある。又よし捨去るにしても、これに代るものは大衆の氣持に合うものでなければならぬし、それにはもう少し世間が落つてからがよくなるかと思はれた。

それはともかくとして占領下の国会の論議は、本会議の委員会でも、公開のも非公開のもの、毎日事務局で整理ができ次第、すぐ総司令部に報告されなければならなかつた。夜の十一時に整理が済んだら十一時、午前三時だつたら午前三時、車は時を移さず飛んで行く。それであちらには国会の動きが、手にとるようになつてゐる仕掛である。

二十二年十二月その筋からこの方面の話を受けた政

府は、従來の祝祭日を政令で一氣に改めようとした。丁度森戸文相が出張不在中でもあり、大分あわてゝいたらしい。一夜漬けのお粗末な案で、こゝに紹介するのも如何かと思はれるしるものだつた。兩院の文化委員はこぞつてこれに反対したが、勢のおもむくところ結局国会の責任において、いわゆる議院立法をやることにしてその筋の諒解を得た。

われわれの本格的な仕事が始まつた。まずこれまでの祝日(四大節)と大祭・小祭日を検討した。宮内府では特に高尾課長に、この時以來ずつとお世話になつた。しつかりした、いゝ人だつた。また新しい祝祭日選定のための諸般の研究も始めた。同時に各界の意見聴取内閣世論調査班への世論調査依頼をやり、外国の事例も一応調べた。別に時事通信社が中心で全国の新聞社を動員して行つた世論調査や、各地からの團体的な請願陳情、個人的な投書數百通は貴重な参考になつた。衆議院の文化委員会が終始一貫會議を公開したことは、外部からの協力をよほど得易くしたようである。それでも始めから私の念頭にあつたことは、やはりもう少し時期を待つた方がよくなるかということであつた。しかしせつばつまつた今となつてはこれでもできない。委員長と相談して、審議の引延しでは決しないが、できるだけ慎重に取扱う方針を立てた。

第二四八号 目次

フーズ博士を迎えて……………	(表紙二)
祝祭日改訂始末……………	武藤 智雄(一)
学内報……………	(四)
卒業式挙行―入學試験施行―定例評議員 会開催―入學式挙行―フーズ氏來學― 中央大學総長來學―公開講演會・學會― 學會出張―人事異動	
校友……………	(五)
千里山昭八會開催―土曜會開催―弁理士 千里山會結成―関西大學修士會結成―支 部會―長柄・森田阿氏渡歐―松本師寶山 寺貫主就任	
學科目担任表……………	(六)
生活水準への問題意識……………	(二)
フーズ博士供覽圖書目錄……………	(三)
學生……………	(四)
SCAPより寄贈書一覽……………	(六)
圖書解題……………	(表紙三)
スビード著「英國史」 ロラン著「古代史」	

ところで同じ国会でも、衆議院と参議院とはよほどその行き方が違う。衆議院は議員の任期四年、その間いつ解散があるかもわからない。勢い選挙区には始終帰るし、大衆の氣持は割合によく通じている。一方参議院は任期六年、解散もない。自然大衆への接觸度が浅い。それに、より専門家より文化人を以て自任しているだけに、時として机上のインテリ論議に溺れることがある。祝祭日の改訂に際しても、これこそ参議院の独壇上だとの説を何度聞かされたことだろう。それでも改訂案が国会で二つに分れるのも如何かという事になって、両院別々に審議はするが、最後は一つの案にまとめることに話がついた。

両院の審議が始まると、果せるかな参議院の論議は華やかだった。氣負い立っていただけに、せつちかでもあつた。文化国家にこたえる文化の日、ポロイスカウトや兒童福祉協會熱望の子供の日、元服や徴兵検査に代つて、大人になることを自覚し、それを祝いはげますとかいう成人の日などが矢継早やに、名乗り上げられた。逸早く紀元節廃止を決めて暦日が明確な聖徳太子記念日を置く案を立て、どこかからはグッドアイディアと賞められたと、お得意でもあつた。

急テンポに固まつた案は、その都度衆議院にもたらされた。これで行きなさい、早くやりなさい、というわけだった。よほどこちらの態度が齒がゆかつたらしい。そこにはまた、法律は一度公布されたら、大衆によつて文句なしに聽従されるものとの過信もあつたようである。素人ほどこわいものはないと思つた。おそれとは請合えない所以である。お蔭で私は随分と面責された、ディレクチヴを出すと言つているぞと囁かれたことも再三だった。しかし国を挙げての祝祭日であり、

国民全部が参加するたて前上、そう軽々に運べる道理はなかつた。衆議院側では委員各自も意見を寄せて、慎重に協議を進めて行つた。

参議院が事大小となく、一々その筋に相談していたのに反し、われわれはわれわれの責任に於て最後案まで漕ぎつけてから、その筋に持つて行くつもりでいた。ところが五月に入つてから委員長と私が司令部に呼ばれた。相手はバンス氏、穩厚な長身の紳士だった。こちらの審議状況が聞かれた後、現行祝祭日に対する見解が示された。大体左の通りであつた。

民主国家になつた以上天皇に關係あるもの、乃至國家神道的なものには取止めて欲しい（これに入るものは春季・秋季の皇靈祭・神武・大正天皇祭、それに元始祭、神嘗・新嘗祭）

明治節はポーターラインケース、明治の時代を記念するならいゝが、明治天皇を浮出たせるならば不可。紀元節は日本書紀の建国傳説を想起させるから、たとへ建國祭と改めても不可。神武天皇紀元は不正確であり、建國の史実は不明瞭である。

結局無難なのは一月一日だけであるが、新祝祭日の設定については、新憲法に即している限り御随意にというわけで、積極的な意見は何等示されなかつた。われわれは「さもありません」と今更安心した。ただ衆議院一部議員が提案していた八月十五日の祖先の日又は反省の日は、こちらの意図は純真なものだったが、復讐に切返される虞があるとのことで、再考を要望された。

「祖先の日を讓つて紀元節を取るんだ。」帰る道すがら委員長はこう言つた。議事人らしい颯引だが、時にとつての妙案だとも思つた。

紀元節の処理については、私になお研究が命ぜられ

た。そもそも世論調査では、總理府の時事通信社のも、第一位が一月一日、次が天皇節、そして第三位が紀元節又は建國祭となつていた。かたがた衆議院としてはこれを重く見ていたのである。

諸家の意見も徴したが安倍能成氏のいつもながらの毅然たる態度には敬服したし、池内宏・板沢武雄兩氏の綿密な意見は傾聴に値した。同時に帝大の名譽教授や現役教授で、すつかり幻滅を感じた人もあつた。紀元節反対論を唱えながら、こちらが肯定らしい口吻を洩らすと掌を返すように礼讃を始めた。終始オゾオズして何等自説を吐かないという具合であつた。

この問題についてはその後委員会の諒解を得て、自由党（時の野党）鈴木・原田その他の諸君が司令部を叩いたがやはり駄目、その後改めて委員長と理事諸君が行つたが、依然として「紀元」や「建國」に難色が示された。口には出さないけれども、どうも紀元節や建國祭の意義が従来あらゆる方に拡大されてきたこと、殊に二千六百年祝典の海外反響などがわざわいしているらしいのである。それで私は個人が誕生祝をやるように、國の誕生を祝はうという單純素朴な氣持に出ていることを述べ、嗤嗟の思いつきではあつたが、仮に國始節乃至國始の日ではと伺を立てたところ、それなら差支ないとのことだつた。しかし日附の点になると、やはり埒があかない。二月十一日はもともと日本書紀の建國日附を太陽曆に直したものでから不可、一月一日にすれば書紀の日附そのままだからなお具合がわるいというわけで、途方に暮れてしまつた。これも日附そのものよりも、そこにまつはる行事その他（前に言つたような）連想に難点があるらしいのである。佐藤觀次郎君（社会党）など、「それではいつそ二月十二日にしようや」とやんちゃを言つて、大笑いしたまゝ引下つた。

この頃になると参議院との合同協議会も漸く進んで

きた。例の聖徳太子記念日は佐々木盛雄君（自由党）が反駁することになった。紀元節の代案としてはウエイトが軽し、太子の生歿年代にも二説あり、学界でも十七條憲法の信憑性を疑つている津田左右吉氏の如きがあることを紹介されては、最早影が薄くなつてしまつた。

こんなことまで取引があつてはいけなけれども、両院間の協議は、殊に会期の幕切れに近づく、両者間のギザ・エンド・テイクになりがちである。その間署名たくさんの請願陳情を山と積んだり、特別の刷り物を作つて配つたりする人もあつて、恒例の賑やかな議會風景が展開された。

子供の日が取上げられた。秋よりも春、それも三月ではまだ早いとのことで端午の節句五月に落つた。天長節の外国式の言い方を聞かれて、天皇誕生にな日ると答えたために（しまつた、と思つた。イタリヤ語のチェネトリアコを出せばよかつた）改称に決まり、文化の日はどうしても入れたいとのことで明治節に代り、お蔭で憲法記念日は施行の日たる五月三日に廻されて、四月末から五月初めまで旗日が目白押しに三つも並んでしまつた。労働祭案は十一月二十三日を勤労感謝祭とすることで結着、皇靈祭がいけないなら民靈祭になるわけだが、それも如何かと持つて廻つて氣象学的な春分・秋分の日という祝祭日らしくない名前に落着いてしまふ、婦人の日は幸か不幸か肝心の御婦人議員の中で地久節と国際婦人デーと、わが国での婦人参政権初行使の日たる四月十日の三案に分れてしまつたので見合せとなり、成人の日はねばられて生きてしまつた。

なお、あの頃は平和條約が今にも結ばれそうな氣配だつたし、後の全面・單獨講和論など思ひもよらぬことだつたので、衆議院としては別に、その調印の日など睨み合せて平和の日を置くこととし、国始の日と共に一応保留とすることにした。

この間にも好んでその筋との往復をやつた參議院は國家神道的な「祭」の字が削られたとて満悦だつた。削除させたのかさせられたのかわからないが、これで祝「祭」日とは言えなくなつた。そのうちに「祝」の字も危ないとか、參議院では新祝祭日を「国民の日」としたがつてゐるとの噂が飛んだ。私も実はそのゲラ刷りを見せられたのである。衆議院としては祝日で押すことにしてゐたので、もうこれ以上は譲れないと、委員長はカンカンに怒つてしまつた。「国民の日」も一案で、總括的な呼び方としては垢抜けしているが、「祝」の字を全面的に禁字にするのはうなずけないしそれに噂の通りならば、その持つて行き方がいやだつた。委員長の意を受けた私は康熙字典・漢和字書、それに大言海と大日本國語辭典を両脇にかゝえていわゆるお堀端を訪れ、できるだけの説明をして「祝」の一字を噉止めて來た一幕もあつた。

衆議院案も固まつてきたので、委員会として参考人の意見を徴することになつた。人選を任された私は、時日の余裕もないまゝに半日のうちに安倍能成・池内宏・和達清夫・鳩山薫子、それに日教組中央執行委員奥崎直幸の五氏に交渉して同意を得た。余談ながら時の興党たる社会党が、鳩山女史を「結構だ」といつて快く承知して呉れたのは有難かつた。これは安倍さんの口添もあつてやつと成立つたものであり、御婦人方を国会に迎えることは、実は並大抵のことではないからである。

かくして前後二十五回の會議を経て、一月一日以下成人の日・春分の日・天皇誕生日、憲法記念日・子供の日・秋分の日・勤労感謝の日・文化の日の九つを決

定し、外に衆議院としては国始の日と文化の日を保留とした。

この間前後七ヶ月、委員諸君の勉強は非常なものであつた。委員長は二代に亘つたが、鷹揚に宰配を振つて、事毎に超黨派的な満場一致に持つて行つた福田繁芳君（民主党、たしか本学出身の筈である）、又その後を受けてキビキビと小氣味よく最後案まで漕ぎつけた小川半次君（民主党）の手腕は、高く買はるべきものであつた。

それにしても従來のような適確なゆかりがあつての祝祭日とは異つて、新奇にデツチあげた今度の旗日は全体としても釣合のとれない密木細工で、お世辭にも上出来とは言えなかつた。私はこれをこゝで一旦要綱書として天下に公表し、しばらく放置して世論を見た方がいゝと思ひましたけれども、あせりにあせつてゐる參議院を控えては、それは思ひもよらぬことであつた。またまつた案は法律案として衆議院側で提出することになつた。題名は民主國家に適合させて「国民の祝日に関する法律」と決まつた。提案理由の説明の中には、特にこの法律は骨組を示すに止め、同胞諸君と共にこれに血を通して育てて行きたい旨を織込んだ。參議院側はおせつかいにも、祝日の一々について行事を定めようとして、農林省を呼んで、例えば成人の日の小豆の特配などまで相談してゐたからである。二十三年六月、会期も余すところ四五日になつて本案は衆議院本會議に上程可決、移送を受けた參議院も無修正で通過して、翌七月に公布施行された。

祝祭日の改訂に當つては、上述の如く、參議院が始めから大の乘氣で急テンポに成案をあせり、内容的にも進歩的たらんとしたので、衆議院は押され氣味の観

（十六頁下段）

學内報

卒業式舉行

昭和二十六年卒業式を大学院・学部は千里山学舎、短期大学部・第一高等学舎・第一中学校は天六学舎に於て夫々舉行した。尙日時及び卒業者数左記の通り

大学院 三月三十一日午前十時より

法学研究科 三十八名
文学研究科 二十七名
経済学研究科 三十七名

計一〇二名 内五五名修士学位授與

學部 三月二十日午前十時より

法学部 三八二名 第二部 一八七名
文学部 八二名 第二部 二〇九名
経済学部 三二二名 第二部 一五二名

商學部
第一部 一八二名 第二部 八四名
計一五九〇名

短期大學部 三月十八日午前十時より
商工經營科 二二三名
第一高等學校 三月二日午前十時より
晝間課程一七六名 夜間課程一三三名
計三三四名

第一中學校 三月十七日午前十時より
二一〇名

入學試験施行

昭和二十七年入學試験を大学院・学部第一部は千里山学舎、学部第二部一年短期大学部・第一高等学舎・第一中学校は天六学舎に於て夫々実施した。尙日時は左記の通り

大学院 三月二十五日、二十六日
学部三年 三月二十九日
学部二年一年 三月二十二日、二十三日

日
經商學部一部一年 三月十日、十一日
法文學部一部一年 三月七日、八日
短期大學部 三月三十日、三十一日
第一高等學校 三月六日、七日
第一中學校 三月十二日、十三日

定例評議員會開催

三月三十一日午後三時より千里山大学院学舎に於て定例評議員會を開催、昭和二十七年年度入出予算案を承認可決した。

入學式舉行

昭和二十七年入學式を大学院・学部第一部は千里山学舎、学部第二部・短期大学部・第一高等学舎、第一中学校は天六学舎に於て夫々舉行した。尙日時は左の通り

大学院 四月十九日午前十時
学部第一部 四月十五日午前十時
学部第二部 四月十五日午後五時
短期大學部 四月十五日午前十時

第一高等學校 四月八日午前十時
第一中學校 四月八日午前十時

中央大學總長來學

中大央學總長林賴三郎氏他理事教授数名一行は去る四月十九日、本学千里山学舎に來訪、岡野學長木村教授等と懇談の後学内を一巡した。

ロックフエラー財團 フアーズ氏來學

四月二十五日午後〇時半ロックフエラー財團人文科学部長C・B・フアーズ氏が千里山学舎に來訪、新築大学院研究室地下ホールに於て理事長、學長始め諸教授と午餐を共にした後、図書館始め学舎内を見學し、以文館に於て懇談會を開いた。午後四時二十分千里山学舎を出て外苑を一巡、然る後理事長の案内で四ツ橋文樂座に赴き吉田文五郎の人形遣ひを觀賞した。

尙理事長は同二十九日大阪市内内閣見本市會館ホテルにロックフエラー氏を訪問、懇談をなし、同三十日午後九時東上の同氏を大阪駅に見送つた。

關西大學史學會開催

關西大學史學會は去る四月二十六日(土)午後二時より、千里山大学院第二教室に於て、大阪歴史學會(會長・魚澄惣五郎博士・本學講師)と合同講演會を開催した。当日の講演者及び演題は次の通り

人類學と歴史學

本學文學部 横田 健一
漢帝國成立期の一問題
大阪大學文學部 助教授 守屋 美都雄

五月十日午後一時より朝日新聞社大阪本社講堂に於て關西大學國文學會・萬葉學會主催、朝日新聞社後援のもとに公開講演會を開催した。演題並びに講演者左記の通り

萬葉より萬葉へ
關西大學教授 文學博士 沢 瀧 久孝
上代漢文學の一考察
大阪市大教授 文學博士 神田 喜一郎
日本文學の動向と萬葉集
學術會議員 高木 市之助

公開講演會開催

人事異動

講師 池田 栄
本大學教授に任じ法學部勤務を命ずる
講師 寛田 知義
本大學專任講師に任ずる
講師 久保田 晋二郎
大學院員外教授に任ずる
助手 岩本 憲
石尾 芳久
中 義勝
(三頁二頁目)

校友

千里山昭八會開催

四月二十七日(日)午後三時より舞子の浜にて四月例会開催、二十七年度の新幹事に山尾、平井、荒川、中山、宮脇、中村の六氏を選出。續いて母校の評議員改選に対する態度と方針を確認、次いで昭八会の二十周年記念行事を催すことを夫々決定。終つて一同打寛ぎ飲を盡し、午後九時半迄、宴を愉しみ、学歌を齊唱して散会した。出席者次の通り

- 山尾 義泰 宮脇重二郎 岩橋 清
- 前坂 健吉 賀本 依英 中野 利国
- 中村 重雄 山下 秀雄 廣瀬 善臣
- 野田 文雄 藤本順二郎 荒川虎一郎
- 木下 忠夫 大島 武夫 山内定一郎
- 平井 三朗 吉田 一郎 山内喜一郎
- 大川 三三 杉本 信雄 齋藤 正興
- 廣田 憲信 (願不同)以上

土曜會開催

三月六日午後四時より大阪辯護士会館に於て土曜會を開催した。本会は元々関西西大学法学研究会と称し、元本学講師坂本憲三氏が高等試験受験の指導を始め、この研究会員より出た合格者によつて組織されたもので、昭和六年第一回合格者を出し、爾來二十六年までに約百三十名の合格者を出した。この間戦時中終戦後一時中止されたこともあるが、二十二年復活し今日に及んでいる。今回は昭和二

十六年度合格者の祝賀を記念して開催した。阿部氏の司會に始まり、續いて自己紹介に移り、神戸明石等からの來会者もあり、又東京を始め各地の會員からの祝電も十数通の多き上る盛會を見、各自研究生時代の回顧談に華を咲かせ午後七時閉会した。当日の出席者次の通り

- 坂本憲三先生
- 岡田退一、福地壽三(以上判事)、中藤幸太郎、町四郎、本井吉雄(以上檢事)、關岡彰郎、沼田英代治、松浦孝一、小林利、阿部甚吉、佐藤雄太郎、栗本義重、藤合利一、河内三三、赤田旭、澤村英雄、鳥巢新一、上辻徹夫、植垣幸雄、段林作太郎、澁川鶴藏、立入庄司、櫻野誠幸、木田東之助、大津雄作、西昭、日高良雄、田村徳夫、中本照規、川根洋三、岡田政雄、北見得五郎、野村清美、藤井哲三、山田利夫、倉橋泰雄、大井亨(以上辯護士)、佐々田英三(勲銀)、山田十雄、松浦武、船田宗之、西川潤、渡邊教衛、奥村孝、宮内務、嶋島友三郎、生駒敏、南政雄、吉村秀文、島田信治、仁藤一(以上昭和二十六年度合格者)、西村瑛、福原照、柳瀬安、上坂明(以上司法修習生)

辦理士千里山會結成

三月十九日大阪駅前内日本食堂に於て関西大学千里山学部卒業の辦理士により辦理士千里山會が結成せられた。本會は辦理士職掌の完遂と母校の発展とに寄與しようとする集りで、出席者各位の論談に賑はひ、本會の名称を表記の通り決定し、また世話人六名(神戸一名、大阪五名)を置き、事務所を市内南区日本橋筋一丁目録田嘉之方に置くことを決議し、関大法曹辦理士の團結を期し学歌唱和、丸山氏の閉会の辭を以て有意義な會を終つた。尚は当日の出席者左の通り

關西大學修士會結成

三月三十一日午前十時より大学院学舎に於て修士論文合格者五十五名に対し修士記授與式を挙行、その後新卒業生によつて卒業後に於ける母校との連絡を密にし、大学院の勉学を意義づける爲、関西大学修士會を結成した。本會は校友会の性格と學術的品格とを有し、本部は大学院内に置き、新卒業生を以て正會員とシ會長役員を左の通り決定した。

- 名譽會長 岡野智治郎
- 會長 宮田 輝雄
- 副會長 安松 實雄、藤井 昭三
- 常議員 森谷三、宮野正博、中原壽雄、木村 達雄、栗林繁、近藤昭三、上田昭三
- 評議員 成瀬勝、高田大三、原英次、松井信雄、笠置欣一、亀井孝明、栗駒正和、藤野泰志、井口正吉、和泉谷武、藤川成二郎、古下辰雄、前川多三郎、清川守

尼崎支部定期總會

四月五日午後三時より尼崎商工会議所ホールに於て尼崎支部昭和二十七年定期總會を開催した。参集者三十五名、先づ須佐美幹事の閉会の辭に始まり松尾支部長の挨拶あり、次いで校友会々長として岡野学長の大学近況報告を兼ねた挨拶があり、後議事に入つた。支部長座長となり役員任期満了につき役員改選の件は満場一致松尾現支部長の重任と決定、副支部長及び幹事の選出は支部長一任とな

り後日選考通知することに決定した。尚植田氏を推薦校友に理事会へ推薦の動議あり一同異議なく可決議事を終了、然る後宮島理事より大学発展の抱負及び所感を述べられ、續いて森川博士より経済学研究に就いて最近の動向の発表があつた。引續いて宴に入り自己紹介あり飲談に時を移し午後七時学歌齊唱、大学及び支部の万歳三唱盛會裡に散会した。尙当日の出席者左の通り

- 大學側 宮島理事長、岡野學長、森川教授
- 支部側 松尾高一、宮田輝雄、植田弘、山本三郎
- 辻本浩三、伊井秀夫、瀧内鶴夫、瓜惣太郎、濱本正吉、福田敏夫、西本信三、松永三郎、小川進、植村英一、城尾一男、佐藤匡、上野政次、須佐美八郎、前田豊治、天野平一、岩本公夫、伊東順一、弓場晴男、杉田兵作、釜山昭雄、澤田嘉貞、島村清之助、清水陽太郎、近藤新次郎、藤田清茂、原田永信、徳千代文一、堤原太平(願不同)

吉橋鐸美氏近畿財務局長就任

前東海財務局長吉橋鐸美氏(昭六法学部卒)は今回近畿財務局長に就任した。

長柄、森田両氏渡歐

計理士長柄金吾、同森田森両氏は來る六月十五日よりロンドンで開催の國際會計士代表者會議に出席、終了後、各國視察の爲、本月末空路出発の予定。

松本實道師寶山寺貫主就任

松本實道師(昭和三年専門部文学科卒)は去る五月一日、聖天詣で有名な生駒山宝山寺十八代貫主に就任した。

昭和二十七年年度

（学）科 目 担 任 表

（昭和二十七年五月十五日現在）

新制大学院

法學研究科

專攻科目

政治学研究(講義) 教 授 岩崎 卯一
 同 (演習) 同
 民法学研究(一)(講義) 教授 木村 健助
 同 (演習) 同
 刑法学研究(講義) 教 授 植田 重正
 憲法学研究(講義) 教 授 中谷 敬壽
 同 (演習) 同
 民法学研究(一)(講義) 教授 福島 四郎
 同 (演習) 同
 刑法学研究(演習) 員外教授 滝川 幸辰
 商法学研究(講義) 員外教授 西本 寛一
 同 (演習) 同
 行政法研究(講義) 教 授 中谷 敬壽
 英米法研究(講義) 員外教授 大阪谷公雄
 國際法研究(講義) 員外教授 恒藤 恭
 法制史研究(講義) 講 師 猪熊 兼繁

文學研究科

專攻科目

國語及國文學研究(演習)
 教 授 飯田 正一

哲學及哲學史研究(講義)

教 授 岡野習次郎
 同 (演習) 同

國語及國文學研究(講義)

教 授 大小島眞二
 同 (演習) 同

哲學及哲學史研究(講義)

教 授 金子又兵衛
 同 (演習) 同

英語學及英米文學研究(演習)

教 授 田中 照
 同 (演習) 同

英語學及英米文學研究(講義)

教 授 山田松太郎
 同 (演習) 同

國語及國文學研究(講義)

員外教授 石田 憲次
 同 (演習) 同

英語學及英米文學研究(講義)

員外教授 小島 吉雄
 講 師 中西信太郎

國語及國文學研究(講義)

講 師 山本 忠雄
 同 (演習) 同

歷史學研究(西洋史)(講義)

教 授 安藤 俊雄

歷史學研究(東洋史)(講義)

教 授 石浜純太郎
 同 (講義) 教 授 高橋 盛孝

大陸文學研究(講義)

員外教授 渡辺 格司
 講 師 岩倉 具実

古典語研究(講義)

講 師 魚澄惣五郎
 同 (講義) 講 師 大塚 高信

英語學研究(講義)

講 師 大塚 高信

經濟學研究科

專攻科目
 日本經濟史研究(講義) 教 授 鑄方 貞亮
 同 (演習) 同
 經濟理論研究(講義) 教 授 三谷 友吉
 同 (演習) 同
 金融經濟論研究(講義) 教 授 森川 太郎
 同 (演習) 同
 一般經濟史研究(講義) 教 授 矢口孝次郎
 同 (演習) 同
 會計學研究(講義) 員外教授 久保田晉二郎
 同 (演習) 同
 財政學研究(講義) 講 師 藤谷 謙二
 同 (演習) 同

獨文經濟學研究(講義)

教 授 三谷 友吉

英文經濟學研究(一)(講義)

教 授 三谷 友吉

學 部

(傍線は一般教
 育科目を示す)
 教 授 森川 太郎
 同 (一)(講義) 教 授 矢口孝次郎
 會計監査論研究(講義) 講 師 陶山誠太郎

法 學 部

教 授
 民法第二部、英法、法學演習 明石 三郎
 社會學、政治學概論 岩崎 卯一
 政治史、政治學、外國政治書 池田 栄
 商法第一部、法學演習、英法 池田定太郎
 刑法第一部、第二部、英法、法學演習 植田 重正
 國際法、外國政治書(前)、政治學演習 川上 敬逸
 佛法、民法第三部、法學演習 木村 健助
 日本國憲法(前)、法學演習、行政法第一
 部及第二部 桜田 馨
 憲法、行政法第一部、法理學 中谷 敬壽
 獨法、民法第三部、法學演習 福島 四郎
 民法第一部、英法、法學演習 和田 豊二

專任講師
 独法 石尾 芳久
 英法 岩本 豊
 法学 内田 修
 法学、英法 中 義勝
 員外教授
 体育 石渡 俊一
 社会学 浪江 源治
 商法第二部 西本 寛一
 兼任教授
 日本文学 飯田 正一
 独語 上道 直夫
 英語(四) 榎本金次郎
 英語(一) 小野 勇
 英語 梶原 秀男
 日本文学 金子又兵衛
 英語(一) 進藤浩二郎
 倫理学 田中 熙
 佛語(四) 中井 駿二
 英語(四) 八島 治一
 英語(一) 廣瀬 捨三
 独語 福本喜之助
 独語(一) 見次 直雄
 佛語 三木 治
 日本文学 吉永 登
 人類学 横田 健一
 講 師
 西洋史 秋山 博愛
 行政学 足立 忠夫
 体育 猪飼永太郎

生物学 生沢万壽夫
 佛語(一) 石川 湧
 東洋文学 板原 哲夫
 佛語(四) 池長 澄
 日本法制史 猪熊 兼繁
 佛語(四) 宇野 史郎
 商法第三部 上柳 克郎
 心理学 遠藤 汪吉
 英語(一) 小川 忠藏
 国法学 大石 義雄
 独語(一) 梶野 膜
 信託法(後) 大阪谷公雄
 心理学 川口 勇
 体育 川口 清
 数学、化学 河村 信一
 政治学、政治哲学(前) 木下 丹
 体育 岸源左右衛門
 独語 久保田 肇
 财政学 小谷 義次
 社会学 小山 隆
 佛法、國際私法 齋藤 武生
 刑法第二部(後) 佐伯 千似
 经济学原論(前)、经济学 沢村 栄治
 英語 菅沼 舜治
 数学 杉原 雅
 西洋法制史 田中 周友
 生物学 田中 英雄
 地方自治 高橋 貞三
 体育 高橋 哲雄
 佛語(一) 竹村 茂助

國際政治学(前)、外交史 立川 文彦
 英語(三) 玉木意志太半
 独語(四) 中川 清三
 体育 中川 敬
 商法第二部、法学演習 西原 寛一
 英語 庭田 四郎
 佛語(一) 原 政夫
 体育 原 利一
 哲学 藤本 是
 法律思想史 武藤 智雄
 英語 星野 信夫
 哲学 細川 董
 佛語(一) 堀井令以知
 英語(一) 本多平八郎
 論理学 眞辺 春藏
 英語 増田 忠雄
 英語(一) 三宅川 正
 独語(一) 溝辺 龍雄
 刑事訴訟法 毛利 與一
 政治学史 森 義宣
 独語(四) 矢野 純臣
 民事訴訟法第一部及第二部 山本戸克巳
 英語(三) 山本栄一郎
 独語 米田 颯
 心理学 和田 陽平

文學部 教授
 史学概論(前)、西洋史概説、西洋史特 安藤 俊雄
 殊講義A、西洋史演習
 日本漢学史、東洋史特殊講義A、東洋 石浜純太郎
 史演習 日本文学、国文学史、国文学演習(一) 飯田 正一
 新聞学概論(前)、新聞経営論、内外時 井上吉次郎
 事解説、新聞演習(三) 專門独語(一)、独文学作品研究(三)、 上道 直夫
 独文学演習(一)、独語(四) 榎本金次郎
 英語(四)、英文文学作品研究劇文学 岡野留次郎
 西洋哲学史概説(一)、哲学概論 大小島眞二
 西洋哲学史概説(二)、哲学特殊講義、 沢瀧 久孝
 哲学演習及講義 小野 勇
 上古文学 金子又兵衛
 英語(一)、專門英語(一) 梶原 秀男
 日本文学、近世文学、国文演習(一) 進藤浩二郎
 英語(一)及(三)、專門英語(三)、演習詩 高橋 盛孝
 文学 梶原 秀男
 英語(一)、專門英語(一)、作品散文学 田中 熙
 支那文学史概説(一)及(二)、支那文学 高橋 盛孝
 史演習 田中 熙
 倫理学、倫理学概論 壺井 義正
 支那文学作品研究(一)及(二)、支那哲 壺井 義正
 学史概説及演習 文学概論(前)、演劇映画学概論(後)、 論説論、新聞演習、佛語(四)

中井 駿二
 英語史、英語(三)(四) 八島 治一
 日本及東洋美術史、考古学 末永 雅雄
 英語(二)、演習詩文学、ギリシヤ語、ラテン語 廣瀬 拾三
 新聞発達史、新聞英語、新聞演習(一) 藤田進一郎
 専門独語(一)、独語史、中世独文学及語学 福本喜之助
 英文学史、作品詩文学、散文学演習 堀 正人
 専門佛語(一)、佛文演習(三)、佛文学作品研究(一)、佛語学概論、佛文学特殊講義、佛語 三木 治
 独語(二)、専門独語(三)、独文学演習(一) 見次 直雄
 米文学史、劇文学演習及劇文学作品研究 山田松太郎
 日本文学、専門国語、中古文学、国文演習 吉永 登
 人類学、日本史特殊講義A、日本史演習 横田 健一
 助教授
 教育心理学、心理学 川口 勇
 教育原理、教育社会学、教育実習 鈴木 祥藏
 英語 廣岡 英雄
 哲学 藤本 是
 東洋史概説、東洋史史料講読、東洋史

特殊講義C 三上 諦聽
 英語(三)及(四) 山本栄一郎
 兼任講師
 西洋史史籍講読、西洋史特殊講義C、西洋史 秋山 博愛
 教育史(前)、社会教育法、教育実習 算田 知義
 佛語 高塚洋太郎
 員外教授
 体育 石渡 俊一
 近古文学 小島 吉雄
 独文学史、独文学演習(三) 渡辺 格司
 兼任教授
 政治学 池田 栄
 社会学 岩崎 卯一
 日本国憲法 椋田 誉
 講 師
 専門国語 秋本 吉郎
 佛文学史 伊吹 武彦
 生物学 生沢万壽夫
 佛語(一) 石川 湧
 東洋文学、専門漢文 板原 哲夫
 佛語(四) 池長 澄
 西洋史特殊講義B 今津 晃
 言語学概論、ギリシヤ語、ラテン語 岩倉 具実
 日本史概説 魚澄惣五郎
 佛語(四)、専門佛語(三) 宇野 史郎
 日本国憲法、法学 内田 修

独文学特殊講義(一) 内山貞三郎
 心理学、教育心理学 遠藤 汪吉
 英語(二) 小川 忠藏
 佛語(三) 小方 厚彦
 日本史特殊講義 小葉田 淳
 統計学 岡部 利良
 論理学 加藤由治郎
 独語(一) 梶野 脛
 体育 川口 清
 数学、化学 河村 信一
 作詩作文法 川村勝太郎
 佛語 鯉田 博夫
 政治学 木下 丹
 自然地理学概説 木村 春彦
 体育 岸原左右衛門
 宗教学概論 久山 康
 独文学特殊講義(二) 小牧 健夫
 世論及宣傳 小山 栄三
 社会学概論 小山 隆
 佛文学作品研究(二)、演習(二) 佐野 一男
 独文学作品研究(一) 斎藤 清
 近代文学 舛原 美文
 経済学 沢村 栄治
 独語(三) 潮崎 俊一
 日本史特殊講義B 柴田 実
 数学、科学概論 杉原 雅
 独語(三) 鈴木 重貞
 専門佛語(二) 荏保 三郎
 体育 高橋 哲雄

佛語(三)佛文学作品研究(三) 佛文学 田中 栄一
 演習 田中 健一
 商学科、職業科教育法 田中 英雄
 生物学 田中 英雄
 印度哲学史概説 高島 寛我
 日本史特殊講義C 竹田 聽淵
 佛語(一) 竹村 茂助
 英語(二) 玉木意志太半
 美学概論、演劇映画学(前)、西洋美術史 辻部政太郎
 支那語 辻本 春彦
 法学 中 義勝
 独語(四) 中川 清三
 体育 中川 敬
 独文学作品研究(二)、独語(二) 中村 恒雄
 新聞編集論、取材論 長野 敏夫
 国語科教育法 西山 隆二
 英語 庭田 四郎
 佛語(二)及(四) 原 政夫
 体育 原 利一
 国語学概論 林 和比古
 実用英語 パーワー
 英米佛哲学 樋元 和一
 専門漢文 福島 俊翁
 放送論 藤田 義信
 東洋史特殊講義B 藤本 勝次
 英語 星野 信夫
 哲学 細川 董
 佛語(一) 堀井令以知

英語(一) 本多平八郎
 英語(三) 增田 忠雄
 外国語科教育法 增山 節夫
 論理等 眞辺 春藏
 英語(一) 三宅川 正
 獨語(一) 溝辺 龍雄
 日本史料講読 村山 修一
 人文地理学概説 山口平四郎
 英語学演習 山本 忠雄
 中古文学 山脇 毅
 獨語(四) 矢野 純臣
 近世文学 吉永 孝雄
 英語(四) 吉田 安雄
 獨語(一) 米田 颯
 心理学概論 和田 陽平

經濟學部
 教授

金融經濟論、演習 森川 太郎
 經濟史、演習 矢口孝次郎
 兼任教授 今西庄次郎
 証券市場論、演習 植野 郁太
 會計学總論、演習 賀屋 俊雄
 佛文經濟書、演習 河野 稔
 社会政策、社会思想史 河野 稔
 交通經濟学、演習、商業經濟学 河村 宣介
 貨幣論、銀行及信託論、英文經濟書 安田 信一
 演習 英文經濟書 山口 辰雄
 講 師
 民法 明石 三郎
 政治学 池田 栄
 佛語(四) 池長 澄
 法学 石尾 芳久
 佛語(一) 石川 湧
 体育 石渡 俊一
 社会学 岩崎 卯一
 生物学 生沢万壽夫
 日本文学 飯田 正一
 法学 岩本 懸
 經濟地理学 宇田 米夫
 日本国憲法、行政法 内田 修
 佛語(二) 小方 厚彦
 英語(二) 小川 忠藏
 英語(一)及(三) 小野 勇
 獨語(二) 大崎 義夫
 經濟哲学、社会思想史 加藤由次郎

日本文学 金子又兵衛
 日本文学 釜田喜三郎
 佛語(三) 鎌田 博夫
 国际法 川上 敬逸
 心理学 川口 勇
 体育 川口 清
 数学 河村 信一
 体育 岸源左右衛門
 政治学 木下 丹
 商法第一部及第二部 国茂 鳳臣
 财政学 小谷 義次
 保險論 近藤 文二
 獨語(四) 斎藤 清
 憲法 板田 營
 獨語(三) 潮崎 俊一
 英語(三) 進藤浩二郎
 英語(四) 菅沼 舜治
 数学 杉原 雅
 獨語(三) 鈴木 重貞
 佛語(一) 莊保 三郎
 佛語(二) 田中 熙
 生物学 田中 健二
 人類学 田中 英雄
 体育 高橋 盛孝
 日本史 高橋 哲雄
 公企業論 竹田 聽洲
 英語(二) 竹中 龍雄
 簿記概論 玉木意志太半
 富山 忠三

佛語(四) 中井 駿二
 獨語(四) 中川 清三
 体育 中川 敬
 獨語(一) 中村 恒雄
 社会学 浪江 源治
 社会学 難波 紋吉
 财政学特殊研究 西川 清治
 物理学 橋田 慶藏
 英語(三) 八島 治一
 佛語(一)、(三)、(四) 原 政夫
 体育 原 利一
 獨語(一) 廣岡 英雄
 獨語(二) 廣瀬 捨三
 東洋文学 福島 俊翁
 獨語(三) 福本喜之助
 演習 藤谷 謙二
 哲学 藤本 是
 經濟原論 堀 経夫
 外国經濟事情 堀 武雄
 英語(一) 星野 信夫
 佛語(二) 堀井令以知
 論理学 眞辺 春藏
 國際金融論 松井 清
 英語(一) 三宅川 正
 英語(四)、英文經濟書 水谷 揆一
 佛語(四) 矢野 純臣
 英語(二) 山崎 紀男
 獨語(一) 米田 颯
 農業經濟学 山岡 亮一

商學部

教授

証券市場論、經濟政策、演習
今西庄次郎
會計學總論、演習、經營學總論
植野 郁太
佛文經濟書、貿易實務論、商業英語演習
賀屋 俊雄
社會政策、勞務管理論、英文經濟書
河野 稔
銀行及信託論、演習、金融經濟論
安田 信一
兼任教授
經濟史、演習
鑄方 貞亮
商品學、數學、
河村 信一
演習、商業經濟學、交通經濟學
河村 宣介
經濟學、演習
沢村 栄治
獨文經濟書、英文經濟書、演習
杉原 四郎
經濟統計學、演習、統計學
高木 秀玄
國際經濟論、經濟變動論、演習
中川庸太郎
演習
三谷 友吉
金融經濟論、演習、經濟原論
森川 太郎
工業經濟學、演習
松原 藤由
英文經濟書
山口 辰雄
經濟史、演習
矢口孝次郎

講師

民法
明石 三郎
政治學
池田 栄
佛語(四)
池長 澄
法學
石尾 芳久
佛語(一)
石川 湧
體育
石渡 俊一
社會學
岩崎 卯一
生物學
生沢万壽夫
法學
岩本 豊
經濟地理學
宇田 米夫
佛語(一)
宇野 史郎
佛語(三)
上道 直夫
獨語(三)
内田 修
日本國憲法
小方 厚彦
佛語(三)
小野 勇
英語(一)及(二)
小川 忠藏
英語(二)
大崎 義夫
獨語(一)
經營比較
岡部 利良
日本文學
金子又兵衛
日本文學
釜田喜三郎
國際法
川上 敬逸
心理學
川口 勇
體育
川口 清
體育
岸源左右衛門
工業簿記原價計算
久保田晋二郎
商法第一部及第二部
国歳 胤臣
財政學
小谷 義次
保險論
近藤 文二
憲法
桜田 馨

獨語(四)
齊藤 清
生産管理論
菅谷 重平
英語(四)
菅沼 舜治
數學
杉原 雅
獨語(三)
鈴木 重貞
佛語(一)
莊保 三郎
倫理學
田中 照
獨語(二)
田中 健二
生物學
田中 英雄
佛語(三)
田辺 純夫
人類學
高橋 盛孝
體育
高橋 哲雄
日本史
竹田 聰洲
公企業論
竹中 龍雄
英語(二)
玉木意志太郎
企業財務論
丹波康太郎
工業簿記原價計算、會計監査及分析
陶山誠太郎
簿記概論
富山 忠三
體育
中川 敬
獨語(一)
中村 恒雄
經營學特殊研究
餘江 城夫
物理學
橋田 慶藏
佛語(二)、(三)、(四)
原 政夫
體育
原 利一
英語(三)及(四)
廣岡 英雄
東洋文學
福島 俊翁
演習
藤谷 謙二
哲學
藤本 是
經濟原論
堀 経夫

商業數學、會計學特殊研究

堀江 義廣
標準原價予算統制
本田 利夫
外國經濟事情
細野 武雄
英語(一)
星野 信夫
論理學
眞辺 春藏
國際金融論
松井 清
英語(一)
三宅川 正
英語(四)英文經濟書、商業英語

短期大學部 (傍線は一級教
育科目を示す)

(第一部及第二部共)

商工經營科

教授

工場管理、工作法
入江 深
物理學、生産材料
太田 鷄一
數學、商品學
河村 信一
交通論、商業演習
河村 宣介
哲學
加藤由次郎
英語經濟書研究、商業概論、商業演習
佐伯 三郎
設計製圖、商業數學、工業演習
佐々木富五郎
英語
角田 文雄
商業演習、簿記會計學、英語經濟書研
究
富山 忠三
(一三頁)

生活水準への問題意識

—— 鷗外の『高瀬舟』に寄せて ——

杉原四郎

森鷗外に『高瀬舟』という小説がある。寛政のころの
話で、弟殺しの大罪で遠島仰せつけられた喜助という
青年を、羽田庄兵衛という初老に近い同心が、高瀬舟で
護送してゆく。月を仰いで黙つて坐つてゐる喜助の顔
には些かの愁いの影もなく、口笛でも吹きはじめそ
うな樂しげな様子なので、不思議に思つた庄兵衛がそ
の心算を問うと、喜助がいうのは、世間を樂をしてい
た人なら遠島はつらからうが、自分のような苦しい生
活をしてきたものには、たとえ島にでもそれ以上のつ
らさがあるとは思えない、それに「わたくしはこれま
で、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがござ
いませんでした。こんどお上で島にゐると仰やつて下
さいませ。そのゐると仰やる所に落ち著いてゐること
が出来ませぬのが、先づ何よりも難い事でございます
す。」その上遠島の罪人には鳥目二百銅を遣すのが当
時の掟なのだが、「わたくしは今日まで二百文と云ふ
お足を、かうして懐に入れて持つてゐたこととござい
ませぬ。どこかで爲事に取り附きたいと思つて、爲事
を尋ねて歩きました、それが見附かり次第、骨を惜ま
ずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左
へ入手に渡さなくてはなりませんだ……それがお牢
に這入つてからは、爲事をせずに食へ……させて戴きま
す。わたくしはそればかりでも、お上に対して濟まな
い事をいたしてゐるやうでなりません。それにお牢を
出る時に、此二百文を戴きましたのでございます……
わたくしは此二百文を島でする爲事の左手にしようと
樂んでをります。」これをきいた庄兵衛は、不足勝ちな
家計にたえずあくせくしているわが身とひきくらべて、
喜助の「欲のないこと、足ることを知つてゐること」
と深くうたれて考え込む。「庄兵衛は只漠然と

人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病が
あると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がな
いと、食つて行かれたらと思ふ。万一の時に備へる蓄
がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつて
も、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先
から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止
まることが出来るものやら分らない。それを今日の前
で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衛
は氣が附いた。
庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見
た。此時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から曙光が
さすやうに思つた。」

「小さい時に二親が時疫で亡くなり」、「軒下で生
れた狗の子」のように人々の「お患」で育つた喜助、
いつも「爲事を見附けるのに苦んで」、「それを見附
けさへすれば、骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊
すること」が出来、「大抵は借りたものを返して又跡
を借り」というその日暮しの喜助、不治の病を苦し
して兄の留守に喉をつきこねて苦しんでる弟を樂に
してやろうと剃刀を削口からぬき、はからずも弟殺し
の大罪をおかしてしまつた律氣者で小心者の喜助が、
「牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天
から授けられるやうに働かずには得られないのに驚いて、
生れてから知らぬ満足を感じた」のは自然である。わ
ずかな扶持米で七人の家族を養うために「儉約な生活
をして」ゐる庄兵衛、「好い身代の商人の家」から迎
えた妻がやりくりが下手なのを氣に病みながら「借財
と云ふものを毛虫のやうに嫌ふ」庄兵衛、安樂死がは
たして「罪であらうか」と一応は疑いながらやつぱり

「お奉行様」という「オオトリテエ」の「判断を其儘
自分の判断にしようと思」うこれまた律氣者で小心者
の庄兵衛が、喜助の告白に胸うたれてこれを生佛のよ
うに思いあがめるのも自然である。寛政といへばわ
ゆる徳川三大改革の一つが行われた時代だが、やはり
大きな大きな改革のあつた七十年前の享保頃からは体
制的矛盾も一段とふかまつてきて、一方では喜助のよ
うな浮浪者が激増し、他方では庄兵衛のやうな下級武
士が窮乏する。だが、鷗外が『大鹽平八郎』でとりあ
げている三十年後の天保の時代とくらべると、都市の
細民の中にはまだ喜助のような素直なものも居て、暴
民による「打こわし」もそれほどはすすんでなく、庄
兵衛級の武士にしても、辛うじて内職や借金をせずに
すごせた時代である。このような時代における最下層
の支配者が最下層の被支配者の見上げた心掛けに感激
して思はず「喜助さん」とよびかけ、「此称呼の不穩
当なのに氣が附いて」「少し間の悪い」思いをするこ
ころなど、當時の事情にくらい私などにも、それが單
なる心理描写では決してないことが察せられるのだから、
専門の歴史家が、鷗外の歴史小説の中で「歴史離
れ」の代表作とされる『高瀬舟』についても鷗外が見
事に時代の本質をつかんでゐることに「敬服する」
(服部之總『歴史文學あれこれ』の道理である。
『れ』改題二十七年三月号)

鷗外が「人の欲には限がないから、錢を持つて見る
と、いくらあればよいといふ限界は見出されぬ」の
に、「二百文を財産として喜んだのが面白い」(『高瀬舟』)
と思つて、「翁草」から取材したこの小説を『中央公
論』に発表した大正五年というのは、その前々年に勃
発した世界大戦の日本経済に対する深刻な影響が誰の
目にもあらわになり、インフレーションに伴う物價騰
貴によつて、一方では戦争成金が續出するが、他方では
老大な貧民層も生じるといふ時代で、河上肇の『貧
乏物語』が朝日新聞に連載されて非常な反響をよんだ
ものこの年である。ある人は、鷗外がこの小説で「自
ら足ることを知つてゐる人間の、不幸に於ける諦念の
幸福を、喜助といふ形象に於て仮託」することによつ

て、大道事件後の沈滞期から漸く脱せんとする社会運動に対する「批判を行つてゐる」と解する（『岩波文庫』の『歴史文學論』）のだが製作のモチーフを鵬外自身「高瀬舟縁起」でべている以上に付度することは専門家の研究にゆずることにしてしよう。あきらかなことは、そして重要なことは、この小説をよんだ戦争成金やそれと本質的に利害を同じくする人々が、喜助のように従順な、すなわち鵬外がその実現のために盡力したといわれる「済生会」のようなものを「お上のお慈悲」としてありがたがり黙々と「骨を惜まずに働いて、やうやう口を糊することの出来るだけで満足」するような庶民の一人でも多からんことを願ひ、庄兵衛のような穩健な、すなわち西欧思想の「功利的・唯物的・快樂主義的」性格に東洋乃至日本精神の「知足安分」的性格を対比せしめ、後者をより高しとすることによつて清貧を偷しむ境地にあるかのような、そして当局の処置に疑念はもつても結局は「オトリテエ」に頭を下げるようなインテリの一人でも多からんことを願つたに違いないということ、にもかかわらず、内外の情勢は大正七年七十万の大家をまきこんだといわれる米騒動によつてついに寺内内閣を崩壊せしめる（『正政治三』三卷）と同時に、「デモクラシー」という時代の呼声の中で相次いで発足した新しい研究団体や雑誌や政党などへ多数の進歩的知識層を結集して行つたということ、にもかかわらず、低賃金政策を支柱とする日本資本主義の基本構造はすこしもゆるがず、大陸への侵略に伴つて向上してきた昭和九一年の生活水準でも欧米諸国と比べるとその二一三〇パーセントにすぎず（『江口・山下』『日本の生活』）としてこのような生活のみじめさに対しては、その不可避性や有意義性を「証明」する理論や、個人の对症療法としての家計やりくり法乃至成功美談や、喜助庄兵衛のものの見方の末期的頹廢形態たるすて鉢の感情やが、それぞれの階層に種々の仕方で強力に宣傳されたそれらがかなり一般的にうけ入れられてきたということ、以上要するにわれわれは客観的にも主観的にも

貧乏人根性——より明確には「債務奴隸」的な意識と
いうべきであろう（『前編論』）——を脱しきれないままに、
敗戦の日をむかえた、ということこれである。

四

私のもつている昭和十三年初刷の岩波文庫版は昨年五月で第十二刷、ラジオで時々放送されているのを耳にすることもあるから、「高瀬舟」は数ある鵬外の作品中今でも最も親しまれているものの一つであろう。漸く昭和九一年の八割見当にまで回復してきた生活水準——基準年度の水準そのものが前にのべたように低いことから、それはむしろ生存水準とよんだ方がふさわしからう（『補谷繁雄』『久し振りの日本』）——が朝鮮動乱以來ふたたびはげしい不均衡と不安定にさらされはじめている現在、「高瀬舟」の読者の中には、喜助の告白を身につまされて、読み、彼の頭に毫光を見た庄兵衛の心境に惹かれる人もすくなくないであろう。しかし、大正期のそれとは格段の相違のある大規模な民主化運動を戦後経験してきたわれわれは、客観的には今尚ロントワリーのいわゆる「貧乏線」以下の生活を余儀なくされているとはいへ、主観的にはかゝるいまいしい貧乏人根性から徐々にぬけ出してきた筈である。すなわち貧しい生活を與えられたものとしてうけとつてこれにどう順応してゆくかということだけが問題であつた消極的な態度から、その生活そのものの分析を通じてそれを「健康で文化的な」生活水準へもつてゆく方策を理論的かつ実践的のどこまでも追求してゆくという積極的な態度への自己革命をわれわれは多少とも体験した筈である。そして、貧乏を觀念的にはなく實際に克服しようとする意欲は、「人的資源の保全」とか「間接侵略への対策」とか「近代的労働市場の育成」とかいうような七むつかしい理論などで正当化される必要などはさらさらないおよそ現代の人間として誰もがもつ自然な切実な要求なのだといふ生き生きとした感覚を多少とも身につけた筈である。これこそわれわれが戦後の波瀾にとんだ生活から得た最も貴重な收穫

というべきであろう。講和後の日本に民主主義を確立するために「民主主義のはんとうの精神をたえず反省し、新たに意識する」という努力をもなお熱心に續けねばなるまい（『大塚久雄』『民主主義の精神を絶えず反省』）と思うのだが、わけてもこのようないわば「生活水準への問題意識」を、あきらかに再軍備を志向しつつある予算に從つて「独立」第一の国家生活をはじめるにあたりわれわれは一段と明確にし且つ深めるべきではないであらうか（『上原繁雄』『再軍備と反省』）。もしそうしなければその予算を説明する場合に政府が用いたような、防衛費が国民所得の一〇パーセント以上を占めている、西歐の国々とくらべて日本の場合にはわずかに三・五パーセント程度だから心配ないという「数字の魔術」（『新聞日号社説』）がいつまでも平気で通用するだらうし、同じ戦敗国でも西ドイツの場合に見られるような、玄関や包裝からはじめずに仕事場や中身からはじめる合理的な経済復興（『同社説』）は、いつになつても行われなければならない。それどころではない、わるくすればわれわれの耳の底にまだかすかに残つている「ホンガリマゼン勝ツマデハ」という標語を、ふたたび口にしなければならぬであろう。

後記

一 本文で私はわが國の四大綜合雑誌のそれぞれから服部・補谷・大塚・上原の諸氏（引用順）の文章を引用した。各々の内容から深い感銘を與えられたが、同時に私の心をつよくうつつたのは、四つの文章に共通する悲痛なひびきであり、これらの尊敬すべき學者たちにあえて切々たる警世的文章を書かしてあげる時局のきびさきであつた。二 一般に「生活水準」という言葉は「消費（生活）水準」という言葉とほぼ同義に用いられて居り、本文でもそれに從つて居るが、消費生活は生活の一方より基本的な生産・勤勞生活との関係において考えられなくてはならないことはいふまでもないであらう。われわれが生活水準への問題意識をとりあげる場合はとりわけその点にまで立上つて論及することは、別の機会にゆずらなければならなかつた。（一九五二・四・二）（『經濟學叢書』）

ロックフェラー財團フアーズ
博士に供覧の圖書及び資料

ロックフェラー財團人文科学部長フアーズ博士は去る四月二十五日來学したが当日図書館に於いて諸教授の説明で博士に供覧した圖書及び資料は次の通りである。



一、万葉集の欧訳書と大阪学者の研究書
The Manyōshū(Nippon Gakujinshu Shinkokan)
Person, J. L.: The Manyōshū. Book 1-7.
Fujihiro, Teisuke: Gedichte aus dem V. Buch des Manyō-shū.
Aston, W. G.: Japanese literature.
Aston, W. G.: Littérature japonaise. Traduction de Henry D. Davray.

契沖自筆万葉集代匠記卷二断簡 (写) 一帖

万葉集類林 十五卷 若冲著 (殿村茂 济旧藏) (写) 一五册

同 (橋守部旧藏) (写) 一五册

万葉集作者履歷 九卷 若冲著 (写) 四册

万葉緯一、日本紀 今井似閑著 (高野辰之旧藏) (写) 一册

万葉類葉抄補闕 神祇部 入江昌喜著 (写) 一册

万葉集註 八卷 五井純頼著 (写) 三册

二、英国方言関係書 六十册

三、西夏語佛典写眞 十数葉

四、河内北玉山発掘出土品(十数点)及び発掘情况写眞(二十葉)

五、文樂人形及び関係書 (写眞は説明を受けるフアーズ博士) (四頁より)

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する

右昭和二十七年四月一日付(各通) 講師 久保田晋二郎

大学院に於ける会計学研究の講座担当を委嘱する 小葉田 淳

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する 玉木意志 太宰 講師 久保田 肇

小方 厚彦 藤本 勝次

昭和二十七年年度本学講師を委嘱する 講師 宇田 米夫

短期大学部専任講師に任ずる 藤谷 謙二

昭和二十七年度本学講師を委嘱する 小谷 義次

願に依り職を解く 教授 藤谷 謙二

昭和二十七年度本学講師を委嘱する 堀井 令以知

(各通) 講師 末 永雅雄

本学教授に任し文学部勤務を命ずる 右昭和二十七年四月十五日付(各通)

教授學會出張

△植田重正教授・中義勝講師は四月二十四日より二十七日まで慶応義塾大学で開催の日本刑法学会に出席。

△池垣定太郎教授は四月二十五日より二十八日まで中央大学で開催の日本私法学会に出席。

△中谷敬壽・桜田登雨教授は四月二十六日より二十九日迄明治大学にて開催された日本公法学会に出席。

△川上敬逸教授は四月三十日より五月三日まで慶応義塾大学で開催の国際私法学会春季大会に出席。

数学、工業演習

英語

原動機、機械要頂、工業演習

兼任講師

人文地理、商業演習

商業演習、商業経営学

貿易実務

統計学

工業経営学、産業概論

金融論

講師

商法

体育

法学

歴史

(一〇頁より) 橋田 慶藏

山口 辰雄

吉木 一朗

宇田 米夫

鯉江 城夫

賀屋 俊雄

杉原 四郎

高木 秀玄

松原 藤山

安田 信一

池垣定太郎

石渡 俊一

石尾 芳久

今井 啓一

内田 修

大坪 一

川並 秀雄

久保田 肇

中 義勝

西本 寛一

バーワー

藤川 建治

堀江 義廣

水谷 揆一

矢口 家治

故障者続出のため殆ど新人で戦つたが、フオーメーションの轉換も影響し二戦とも、敗れた。五月一日東上、早大、法大と定期戦を行うが期待できそうにない。

●庭球部 関西学生庭球春季トーナメント戦に、ダブルスで、本学、滋川、辰馬組は、准決勝に神大組と接戦、二十日は四セット目、降雨で試合中止となり翌二十一日再試合し敗れたが、全日学生の出場権を得た。

●送球部 西日本学生選手権試合が四月二十八、九日藤井寺で举行され、准優勝戦に関学大に敗れた。

本学 0 (0-1-7) 9 関学

五月五日より春季リーグ戦が開始されるが、本年は高学年で固めることではあり、三月末より四月初旬まで、高知で合宿し猛練習を行つて成果を挙げると、新主将吉本以下張切つてゐる。

五月五日 本学 0-1-5 立命

●排球部 昨年、橋崎、難波、藤原、足立等の新人を加えて、多年二部の最下位に低迷していた当部は、一躍、二部で優勝を争う程に充実したが、本春は前衛に身長二米〇六と云う巨人今村を得、攻守に偉力を加えた。更に、中衛には鹿島、和田の両新人の加入あり、従来に見ない強力な陣容を整えたので、本春こそ二部優勝、一部昇格は空論でなく、ここに多年の宿願が達せられるであらうし、

一兩年を出ずして、一部優勝も机上の空論には終らぬであらう。兎に角、ネット際に六尺七寸余の今村の偉軀を見ることが他校の恐畏となるであらう。(写真は排球部員)



●籠球部 不出世の名ガード北野の卒業は何と云つても、当部の戦力には大きなマイナスである。F猿猴の卒業も得点力に響くが、C中井の進歩と、巧者G大東、F三宅の健在に新入部員のいづれもが、五尺七寸以上の巨人揃であるから、練習量によつては決して、バスケット関大の名を辱しめるようなことはないであらう。春季はリーグ戦でなくトーナメントであるから、不覚の一敗があれば、実

力があつても優勝を逸すると云う不運がないでもないが、優勝候補であることは間違いない。

●フエンシング部 全日女子第二位上田悦子、木村、今村の両君を送り出した当部は、本年は最高学年で、レギュラーを固める。全関西学連結成第一年度の昨年は、各人闘志を欠き優勝を逸したが、次年度には大量の卒業生を送り出すことではあり、本年こそ、春秋二季の優勝を是非実現したいものである。四月九日より高知で合宿練習を行つたが、彼地では多大の反響を呼び、連日のように各所に招待され模範競技を行つた。

●ホツケー部 小野前主将一名のみの卒業である当部は、有望なる新人を加え、却つて戦力は強化され、過日、印度各地に轉戦された天野監督の劇しい指導下に全員熱心に練習に励んで居り、連年連続優勝している当部は関西では敵なく、リーグ戦最中である五月五日名古屋に遠征する豫定である。

本春のオープン戦、リーグ戦績は次の通りである。

本学	8-0	和歌山大	オープン
"	2-0	建國高	"
"	5-2	神戸クラブ	"
"	1-1		春季リーグ
●漕艇部		五月三日、四日中之島堂島	

川で第五回朝日レガッタが举行され、准決勝で立命大と対抗、二艇身半の差で破れた。

六月一日には、瀬田川で琵琶湖レガッタが举行されるが、それにも参加する豫定である。

●サッカー部 全日サッカー関西選抜が中百舌島で举行されたが、本学は、准決勝で六甲クラブと対戦惜敗した。

本学 1 (0-1-2) 4 六甲クラブ

本春、関西学生蹴球トーナメントが五月十日より本学グラウンド他で開催されるが、阪神地区ゾーンに出場する本学は順調に勝進めば、強敵関学大と、准決勝で顔が合う筈であり、これが事実上の優勝戦となるであらう。

●卓球部 去る四月十九日、二十日、大阪府下学生卓球選手権リーグ戦が、上六卓球センターで举行されたが、本学はストレートで五大学を破り完全優勝を遂げた。戦績は次の通りである。

本学	4-0	学藝大
"	4-0	阪大
"	4-0	経大
"	4-0	市立大
"	4-0	近大

SCAP : CIE より寄贈のアメリカ文学書

(昭和26年4月)

- Adams, Henry : The education of Henry Adams. (Modern library) 517p.
 Adams, J. Donald : The shape of books to come. Viking Press, 1948. 202p.
 Aiken, Conrad (ed.) : A comprehensive anthology of American poetry. (Modern library) 490p.
 Aiken, Conrad (ed.) : Twentieth-century American poetry. (Modern library) 410p.
 Anderson, Sherwood : The portable Sherwood Anderson. (Viking portable library) 631p.
 Blankenship, Rusaelli : American literature, as an expression of the national mind. Henry Holt 1949. 775p.
 Cargill, Oscar , Intellectual America ; Ideas on the march. Macmillan 1948. 777p.
 Cummings, E. E. : The enormous room. (Modern library) 331p.
 Day, Clarence : Life with father. (Modern library) 258p.
 Dickinson, Emily : Selected poems of Emily Dickinson. (Modern library) 231p.
 Dreiser, Theodore : Sitter Carrie. (Modern library) 557p.
 Faulkner, William : The portable Faulkner. Viking press, 1949. 756p.
 Faulkner, William : The sound and the fury ; & As I lay dying. (Modern library) 532p.
 Hemingway, Ernest : The short stories of Ernest Hemingway. (Modern library giant) 597p.
 James, Henry : The portrait of a lady. (Modern library) 428, 439p.
 James, Henry : The short stories of Henry James. (Modern library giant) 644p.
 James, Henry : The wings of the dove. (Modern library) 329, 439p.
 Jeffers, Robinson : Roan stallion ; Tamar ; and other poems. (Modern library) 295p.
 Jefferson, Thomas : The life and selecteb writings of Thomas Jefferson. (Modern library) 730p.
 Jones, Howard Mumford : Ideas in America. Harvard Univ. Press, 1945. 304p.
 Jones, Howard Mumford (ed.) : Primer of intellectual freedom. Harvard Univ. Press, 1949. 191p.

(未完、以下次号)

(三頁の續き)
 があつたが、足の地についた議論に終始し、参議院のブレイキになつたほどの慎重振りだつた。また参議院が事毎にその筋との連絡を図りつゝも、その紀元節廃止案に対して一部から反論を蒙つた後は非公開の会議さえ敢えてしたのに反し、衆議院は自己責任のたて前に立つて徒らに左顧右眈せず、取るものは取り主張すべきものは主張すると共に、終始一貫いわゆるガラス箱での論議を旨として傍聴希望者にはいつでも入場を認めた。

衆議院が最後まで執着した紀元節については、その後になつて津田左右吉氏が詳細に亘つて三月十五日の建国祭を提唱された。注目すべき説ではあるが、たゞ三月中旬は青年学徒が恰も学年進行期に入つてゐるの気がかりである。また今年に入つて自由党の政調会文部々会でもこれを問題としたようであるが、果して新聞の報道どおりであるならば、世論にかんがみるといふ謙虚さが見えず、取上げ方が一方的でまずかつたのではあるまいか。頭から紀元節の復活を呼号して大向うの喝采を博そうとしてはかえつて逆コースの反撃を蒙つたり、賛成するにきまつてゐる一定の枠の人達を参考人として招いては選挙運動など痛くもない腹をさぐられて氣の毒だつた。

いづれにせよ新しい祝祭日は、俄かごしらえであり出来であつて、今以てなじめないものが多い。かういふ立法はいわば国民立法たるべきであつて、技術的な経済立法などとは違い、老若男女誰しもがそれぞれに意見をほさみ得るものであるから、平和條約発効後の今日では、同胞みんなで再検討するのが望ましい。参考までに這般の祝祭日改訂の経過を一言してみたのである。

— 昭和二七・五・一〇 —

(法 學 部 講 師)

本學重要図書解題 (其五)

8 Speed, John: The historie of Great Britaine, 3rd edition. London 1632.

スピード著「大英國史」第三版 ロンドン 一六三二年刊 一冊
著者ジョン・スピード (一五五二—一六二九年) は英國の歴史家、地図製作家であつて、今から丁度四百年前、Cheshire における裁縫師の家に生れた。長じロンドンに出で家業を継いだ。Sir Fulke Greville の知遇を得て、古い事物の研究に入り、二つの大きな著作を残した。その一つは標記の英國史であり、今一つは五十四からなる英國の各地の地図である。共に一六一一年に完成して發行した。この「英國史」は、Sir Robert Cotton その他三、四人の援助によつて著したのであるが、ジュウリヤス・シーザーの時代からジェームス一世の時代まで、起源、風俗習慣、器物、貨幣、印章等にも及んで叙述している。内容は、從來の誤謬をそのまま継承した点もあるが、又英國史として多大に寄與した点もある。旧所藏者細江逸記博士が、メモに「今日の史学から見ては價值は少いが、当時英國人が自國を如何に見て居たかを知るには貴重資料の一である」と記されている通りである。

本書の藏書は、一六三二年刊行の増補訂正第三版であるが、著者死去後の版であつて、当時相當に読まれたものと思われ。目次に第一部、局部地誌の部のことと書いてあるが、三版にはないので、多分初版には付いていたのであろう。本文一二三七頁、索引八〇頁あり、堅三五センチ、横二三センチ、厚き一〇センチの大冊である。標題紙の次頁に、ジェームス一世への長い著者の献辞があり、本文中に印章その他の挿図が豊富にある。右に述べた英國地図は所藏していないが、一六〇七、八年頃から開始して、一六一年に完成し、Theatre of the Empire of Great Britaine と題名が付けられているが、右の英國史よりも貴重なものと云われている。

あつて、当時相當に読まれたものと思われる。目次に第一部、局部地誌の部のことと書いてあるが、三版にはないので、多分初版には付いていたのであろう。本文一二三七頁、索引八〇頁あり、堅三五センチ、横二三センチ、厚き一〇センチの大冊である。標題紙の次頁に、ジェームス一世への長い著者の献辞があり、本文中に印章その他の挿図が豊富にある。右に述べた英國地図は所藏していないが、一六〇七、八年頃から開始して、一六一年に完成し、Theatre of the Empire of Great Britaine と題名が付けられているが、右の英國史よりも貴重なものと云われている。

9 Rollin, Charles: Histoire ancienne, Nouvelle édition. Paris 1764-1777. 18 vols.

ロラン著「古代史」新版バリー一七六四—一七七七年刊 十三冊
エジプト、カルタゴ、アッシリヤ、バビロニア、メジャ、ペルシヤ、マセドニヤ、ギリシヤの古代史であつて、全十三冊からなつてゐる。第一巻はエジプトとカルタゴ、第二巻は、アッシリヤとペルシヤ、メジャ、第三巻はペルシヤ、ギリシヤ、第四巻はヘルシヤ、ギリシヤとギリシヤの風俗習慣、第五巻は前巻の續きとテイオニユシオス、第六巻はフィリッポスとアレキサンダー大王、第七、八、九巻はシラクユース、アレキサンダー大王の後継者、藝術及び科学、第十一巻は二分冊(但し第一分冊は欠冊)は軍事と語学修辭学その他、第十二巻は文学と哲学、第十三巻は哲学と数学その他、年表索引となつてゐる。堅十八センチ、横十センチ、即ち岩波新書型の小形本ではあるが、総計八二〇〇頁といふ尨大な大作である。挿絵は全くないが、地図が数葉挿入されている。

王の後継者、藝術及び科学、第十一巻は二分冊(但し第一分冊は欠冊)は軍事と語学修辭学その他、第十二巻は文学と哲学、第十三巻は哲学と数学その他、年表索引となつてゐる。堅十八センチ、横十センチ、即ち岩波新書型の小形本ではあるが、総計八二〇〇頁といふ尨大な大作である。挿絵は全くないが、地図が数葉挿入されている。

著者シャルル・ロラン (一六六一—一七四一) は有名なフランスの歴史家である。二十二才にして、Plessis-Sobonne 大学の修辭学の教授となり、一六八八年に王立大学の雄弁法の教授となつた。一六九四年バリー大学の統長に就任し、一六九九年に Beauvais 大学総長に轉じた。一七〇一年には王立碑文及文学アカデミーの会員に選ばれた。一七二〇年総長に再選されたが、三カ月にしてヤンセン教主義者として罷免され余儀なく引退した。彼の主著には、「Traité des Eudes», 1626-8, 「Histoire ancienne» (1630-38), 「Histoire romaine» (1638-) の三書がある。第二の古代史は前述の通りであるが、本書所藏のものは彼の死後に出版されたものである。第三のローマ史は途中で死去したため未完結となつてゐる。ザオルテールは、彼をフランス最初の優れた散文家であると評している。(K. A. 生)

編集後記

◇講和も愈々発効され、明るい五月の空には鯉のぼりが勢いよく泳いでいます。しかし、その前途の困難を思えば、手放しの樂觀は許されないでしょう。

◇占領秘話ともいふべき「祝祭日改訂始末」を武藤先生より又、私共の日常生活に深く示唆される所のある「生活水準の問題意識」を杉原先生より頂きました。御投稿の両先生にあつくお礼を申し上げます。

◇四月發行豫定の學報が、新年度の学内事務繁忙に追われて、本号は四・五月合併号という事にしました。各位の御期待に副えなかつた事をおわび致します。

昭和二十七年五月十日印刷
昭和二十七年五月十五日發行

關西大學學報 第二四八號
一年誌代實費三〇〇円(送料共)

大阪府大淀區長柄中通二丁目
編集人 中 村 浩
發行人 中 村 浩
印刷者 西 井 幾 藏
大阪府北區川崎町七
印刷所 株式 會社 ナニワ 印刷所

大阪府大淀區長柄中通二丁目
發行所 關西大學學報局
電話 堀川(35)一七五六番
振替 大阪二六七七番

明日のあなたの心の糧は

親切で明るい

ブルー・オアシス
青泉社へ

各種 美術書
文藝・哲學書
經濟書

豊富取揃

◎御入手困難な本の御用命は是非当店へ

新刊書籍・雜誌



有限 青泉社

本店 大阪市北区堂島北町四一スバルビル(大毎筋向イ)
電話 淀川 二八五三番

支店 大阪市北区梅田町三(大阪駅前)——年中無休

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十七年五月十五日發行(毎月一回十五日發行)

關西大學學報 第二四八號・五月號

森川太郎著 定價二五〇円

ケインズ經濟學の基線

主として金融視角的な見地からの懇篤なる
ある經濟研究會等最近各地銀行に勃興しつ
る。ケインズ理論の基礎として最も親しみ
好む。乘数理論・投資誘因・利率・消費性
物理論・一般理論・投資誘因・利率・消費性
の八章。

森川太郎著 定價四五〇円(改裝)

銀行職能論

本書は銀行本來の機能について、それと一
般經濟との関連を究明した理論的著作であ
る。近きから遠くまで銀行論乃至金融論
の各論を以て満足せしめ、かつ、その
著者の學位講義を以て、就中ケインズの
務家諸賢からも高く評價されてゐる。

安田信一著 定價三三〇円

貨幣本質論序説

貨幣の本質に関する理論に於て、今日なほ
従來の本質が重要な理論を占めてゐるこ
とは、この部門に於ける理論の未発達を示
すものと云ふべく、殊に金融理論の發展を
本質論の確立に於ける要求せられる。これ
によりて金融理論に於ける安田教授の新業
き礎石たらんとする。

竹島富三郎著 定價一九〇円

金融原論

〔副題・金融經濟の理論と實際〕貨幣論及
び國際金融論の權威として高名なる著者
新業績たる本書は、金融經濟論の体系と
題・金融事象と經濟事象の對照・金融選
質並に用語と事象・金融の對照・金融選
主観的・金融の發展・金融の對照・金融選
つ實踐的知識を習得するに詭向の好著。

正井敬次編 定價三八〇円

體系・貨幣金融辭典

從來のこの種辭典の形式は前後の脈絡に關
係なくアイウエオ順に辭句を配列したに過
きなく、替つたが、本書は貨幣・金融・銀
外金融の各々を辭典式に要約解説し、ま
に金融の個々の事項に精通せしめると、貨
金融學者中の最長老・經濟學博士。

中津茂樹著 定價五〇円

銀行機能の新しい理解

銀行員の担当事務が高庫化・複雑化した今
日、銀行組織の全体が見えぬ、複雑化した
事、銀行の組織の全体が見えぬ、複雑化した
に元氣を乾燥に飽きを見えぬ、複雑化した
容は、銀行業務の重要性を言ふべきを新に
の發展・銀行機能の近代性・銀行機能の
と分化・銀行機能の近代性・銀行機能の

發兌

大阪市東区十二軒町八
振替大阪一八四〇九

産業經濟社

領價三十円